

## 第4章

### 螺鈿細工村の「伝統」の変化



螺鈿細工が施された屏風。

(2008年9月 筆者撮影)

## はじめに

本章と次章では、伝統工芸専門村に関する調査結果を示す。本章が取り上げるのはハノイ南部の旧ハタイ省、ハノイの中心部から約35キロメートル南に位置するフースエン（Phú Xuyên）県チュエンミー（Chuyên Mỹ）である<sup>(1)</sup>。チュエンミーは、伝統的な「螺鈿細工」の専門村として有名である。螺鈿細工とは、貝殻の真珠層を切り出し家具や小物の彫刻部分に嵌め込む、ベトナム紅河デルタ地域の伝統工芸である。螺鈿細工が施された家具や調度品は、ベトナムでは高級品と認識されている。チュエンミーには国家によって「芸術家」（nghệ nhân）と認定された螺鈿細工職人が2015年時点で11人おり、チュエンミーでつくられる螺鈿細工の歴史的、文化的、芸術的な価値は非常に高く評価されている。

しかし、チュエンミーでつくられるものすべてが芸術的な「作品」というわけではなく、その多くは比較的高価なものとはいえ日用品として職人の手によって生産・販売されるものである。そのため、その「伝統」は市場や利益がなければ継承していくことができない。そして市場や収益構造は、市場価値や原材料費、労働力、流通構造など、専門村内外の経済・社会的変化に左右される。伝統を継承するためには、伝統的な生産手法や製品の質を守りつつも、さまざまな変化に対応する経営努力が必要となる。

本章が目指すのは、専門村内外の経済・社会的変化に対応するためにチュエンミーの住民たちが利用する、社会的なネットワークである。ドイモイ初期には情報インフラが整っておらず、また螺鈿細工が特殊な製品であるがゆえに、チュエンミーの住民たちは新たな市場機会や技術、材料や機械に関する情報を、社会的な「つながり」をとおして獲得してきた。そしてチュエンミーの螺鈿細工が産業として発展していく過程で、個々のつながりの数が多くなり、村の外の個人やコミュニティへとつながりの地理的範囲が拡大し、複雑なネットワークに成長した。そのようなネットワークをとおして得られ

たさまざまな情報が、経済・社会変化への対応に生かされ、チュエンミーの「伝統産業」の発展に役立ったと考えられる。

旧来の東南アジア農村研究では、農村社会が二者間関係の連続の「ルースな」システム (Embree 1950) か、組織的な構造をもったタイトなシステムかがひとつの論点であった (重富 1996)。しかし、二者間の個々のつながりの連続は、集合体としては、ネットワークという、そこに参加している者全体の意思や行動に影響する組織的な構造物となっているという点は見落とされてきた。つまり、二者間関係の連続は、必ずしも組織と対極の概念とは限らない。

個々のつながりの連続からなるネットワークの重要性を理論的に理解するためには、「社会ネットワーク分析」(social network analysis: SNA) が分析枠組みとして役に立つ。SNA は、人 (社会的単位) を点で、人と人との関係を線で表し、そのネットワークの形状に注目するものであるが、ネットワークの形状の変化がなぜ重要かといえば、それが情報伝達の効率を高めるからである<sup>(2)</sup>。また、近年では社会ネットワークの変化についての動学的な研究も盛んに行われるようになってきた。

ネットワークの変化が起こる、たとえば近隣者同士が密につながっているコミュニティで、そのうちの1人がコミュニティの外の誰かと新たなつながりをもつと、新たに繋がったその構成員の二者間だけでなく、コミュニティ内の既存のつながりをとおして、ふたつのコミュニティの構成員全体に情報が効率的に伝わるようになる。これは「スモールワールド性」(「小さな世界」) をもったネットワークと呼ばれている<sup>(3)</sup>。さらに、そのような新たなつながりの形成や「つなぎ替え」(たとえば取引先を替える) が繰り返される、あるいはネットワークへの参加者が増えると、多くのつながりをもつ「ハブ」が形成され、さらに効率的に情報が伝達される状況が生まれる場合もある<sup>(4)</sup>。

ただし、チュエンミーの内外でどのようなネットワークが形成され、どのように変化したか、そのネットワークは「スモールワールド性」をもつのか、

情報伝達効率はどの程度向上したのか、といった事柄を定量的に検証することは非常に困難である<sup>(5)</sup>。本研究では、SNAの理論を、專業村の発展における社会的なつながりが果たす重要性を理解するための枠組みとしてとらえ、現実を解釈することにとどめる。実際の調査では、材料の入手や製品の販売における取引相手や、新たな技術、機械の入手先などの情報を収集し、彼らとの関係や地理的な分布の傾向を分析した。

本章ではまず、チュエンミーの螺鈿細工の発展史を先行文献と聞き取りの結果から得られた情報を元に紹介し、その後、筆者が2013年に実施した質問票調査の結果と2011年から2014年にかけて不定期に訪問し実施してきた聞き取り調査の結果を示す。螺鈿細工の製造にかかる労働と技術的な側面や材料の調達と製品の販売のチャンネルをみていくことにより、チュエンミーの螺鈿細工の市場開拓・拡大の様子を示す。

なお、チュエンミーの家内企業は、専門の工房をもたず家屋内で作業している小規模なものが多いため、本章では、家内企業の単位を「戸」と呼ぶこととする。また、調査では、螺鈿細工を行う経営体という側面だけでなく、社会単位としての世帯・家族の状況についても質問している。そのため、本章では、調査対象を示す言葉として「家内企業」という記述と「世帯」という記述が混在している。

## 第1節 チュエンミーの螺鈿細工発展史

### 1. 伝統工芸の起源からドイモイ開始まで

紅河デルタ地域における螺鈿細工は1000年以上の伝統をもち、その起源は現在のチュエンミー社にあったゴハ（Ngô Hà）村（現在は、ゴ [Ngô] 村とハ [Hà] 村に分割されている）とされている。螺鈿細工は中国からベトナムに持ち込まれ、チュエンミーの住民の話では、5世紀にはお盆などに螺鈿細工を

施す伝統工芸がすでにあったという。ただし、文献資料は残されていない。

記録されている歴史のなかでは、現在のチュエンミーに螺鈿細工が根付くのは18世紀後半とされている。1771年に中部で始まった「タイソンの乱」と呼ばれる内乱を避けて現在のタインホア省から逃れてきた職人グエン・キム (Nguyễn Kim) が、当時ゴハ村から名前を変えたチュオンゴ (Chuôn Ngo) 村の村民に螺鈿細工の技術を教えたといわれている<sup>(6)</sup>。その後、フランス植民地期以前から、チュオンゴ村からの移住者がタンロン (現在のハノイ) の旧市街ハンカイ (Hàng Khay) 通りに集住し、螺鈿細工の製品 (おもに漆器の茶碗やお盆、宝石箱などの小物、螺鈿の絵画など) を売ようになり、ハンカイ通りは螺鈿細工通りとして有名になる (Fanchette and Stedman 2010, 233)。

その後の計画経済時代には、チュエンミーにはゴハ合作社という小手工業合作社が1社あったものの、螺鈿細工はおもに農家の世帯単位で細々と続けられていた。螺鈿細工は、東ヨーロッパにも輸出されていたが、1980年代後半にはベトナム国内や輸出先である東ヨーロッパの経済の混乱により、ぜいたく品である螺鈿細工の市場が縮小し、チュエンミーの螺鈿細工は衰退していく。また、この頃には、材料となる貝殻が入手困難になっていたという。

## 2. 螺鈿細工産業の「復活」

チュエンミーの螺鈿細工が本格的に「復活」したのは、1980年代末頃であった。この頃から木工家具の専門村であるバクニン省ドンキ (Đông Kỳ) の商人たちが国内や中国で螺鈿細工の施された家具の市場を開拓し、ドンキの木工家具生産とチュエンミーの螺鈿細工の協同・分業体制が形成され、螺鈿細工の需要が拡大していく (第5章で詳述)。チュエンミーの職人たちは、ホーチミンやフエ、ハノイ、ハイフォンなどの都市に移住し、そこで製品を売ようにもなる。ハノイのレズアン通りやホーチミンのタンビン区には、集住したチュエンミーの住民たちが経営する店が軒を連ねる地域がある。また、国内の螺鈿細工製品の市場が拡大するだけでなく、中国や日本、アメリ

カなどへも輸出され始める。

需要増に合わせて、チュエンミーでは螺鈿細工の職人も増加した。もともと螺鈿細工の伝統のあった現在のゴ村、ハ村以外の村にも広がり、螺鈿細工だけでなく、それを嵌め込む家具や木工品の製造も行われるようになっていった。チュエンミー社にある7村すべてに螺鈿細工を行っている家内企業があり、フースエン県ではチュエンミーの外でも、チュエンミーで働いた職人が独立して螺鈿細工の工房をもつケースも増えている。

筆者がチュエンミーで質問票調査を実施する前年の2012年時点では、社の総世帯数2347戸の約半数に当たる1128戸の世帯が螺鈿細工を行っていた。企業登録をしている螺鈿細工関連企業は8社、合作社は1社と少数であった。当時の人口（8140人）の半数以上の約4500人が螺鈿細工の職人であり、これに加え約700人の労働者が社外から来ていた（世帯数と人口は2014年にはそれぞれ2683戸、1万164人に増加している）。社の2014年経済社会状況報告によると、螺鈿細工関係（製造、運搬、販売など）で何らかの収入を得ている世帯は、社の95%に上る。経済活動の中心は螺鈿細工関連の活動であり、社の農業生産額は、社全体の経済生産額の12%を占めるにすぎない。

## 第2節 チュエンミーの経済活動

### 1. 世帯収入の分布

筆者は2013年8月、チュエンミーにある7つの村のうち、4つの村からそれぞれ40戸ずつランダムに抽出した160戸を対象に、質問票調査を実施した。対象は螺鈿細工および関連の経済活動を行っている世帯である。企業（有限会社）登録をしている企業が1社あるが、その他の159戸は個人基礎であった（登録の有無は不明）。家族労働以外に労働者を雇用している家内企業は106戸であるが、そのうち雇用労働者が親類のみという家内企業が半分の52

戸を占める。家内企業当たりの雇用者数は最大でも13人であり、調査対象の160戸の総雇用者数も135人と、どの家内企業も小規模な経営である。ただし、調査では調査時点での雇用者数を質問しており、通年で雇用していない雇用者も多いため、この数字は正確とはいえない。大口の注文が来た際には、短期の雇用者を雇うことが一般的であるという。雇用者の賃金に関する質問に回答している家内企業が「労働者を雇用している」と回答した家内企業より多い144戸あったため、短期の労働者を雇用している場合も含めれば、家族以外の労働者を雇用している家内企業はもっと多いであろう。しかしいずれにせよ、鉄鋼の専業村チャウケーなどと比較すれば、チュエンミーの調査対象の家内企業の経営規模が小さいことは間違いないであろう。

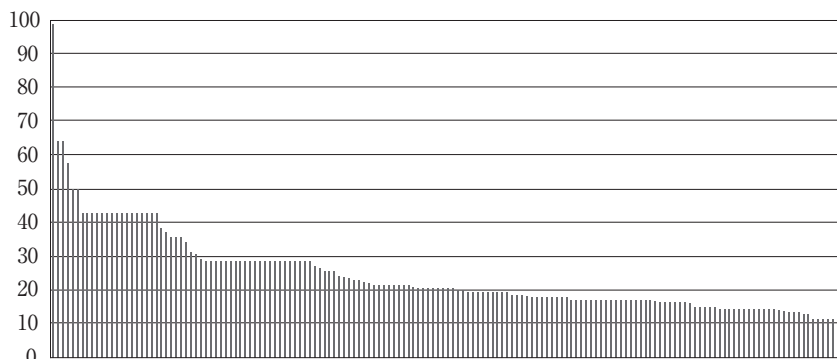
経営者（世帯主）には大学卒業者もいる（1人）が、3年しか教育を受けていない者もいる。中学校卒という就学歴が最も多い（90人）。調査対象世帯の月平均の現金収入（「各種の経費を除いた収入」と質問している）は1716万ドンある。一方、全国規模の家計調査であるVHLSSの2012年調査結果によれば、農村地域の月平均所得は158万ドンである（GSO 2014, 201）。調査の厳密さや対象世帯が異なるため、VHLSSの結果と単純比較はできないが、本調査の対象地域は豊かな農村の部類に入るといってよいであろう。調査対象を螺鈿細工関連の経済活動を行っている世帯に限定したためではあるが、現金収入の総額のなかで、螺鈿細工関連から得ている現金収入の割合は平均で97.9%あり、100%と回答している世帯も93世帯あった。

図4-1は質問票調査結果から、最も高額の現金収入のある世帯の収入を100として各世帯の収入を相対化し、その分布をみたものである（左から現金収入額の高い順に並べて示してある）。最高額と最低額のあいだには10倍の差がある。分布の形（加重平均値25、中央値21）からわかるとおり、低くなだらかな部分が長い。一部を除き同じような小規模経営の家内企業が多くを占めていることがわかる。

チュエンミーでは、螺鈿細工を経営活動の柱としながらも、農地を維持している世帯が多い。調査対象世帯のなかで、農地を保有していない世帯は2



図4-1 調査対象世帯の収入の分布



(出所) 質問票調査結果より筆者作成。

戸しかない（うち1戸は他の世帯から土地を借りて稲作をしている）。農地を保有していない2世帯を除く世帯の平均保有農地面積は0.19ヘクタール（標準偏差0.09）、最大で0.36ヘクタールと、紅河デルタの平均値0.21ヘクタール（GSO 2012）と比べても農地面積は小さい。ただし、農地は保有しているものの、農業を行っていない世帯もある。農地をすべて貸している世帯は56戸ある。親類などに貸し、地代をまったく受け取っていない場合もあれば、コメで地代を受け取る場合もあるという。これに加えて10世帯は農作業を行わず、外部の労働者に委託している。農業（稲作）はほぼ自給のためであり、調査対象世帯のうちコメを販売している世帯は51戸しかなく、販売量は最大の世帯でも年間2.5トンであった。チュエンミーでも、離農は確実に進んできており、それでいながら多くの世帯は農地は維持するという選択をしている。

## 2. 異なる4つの調査村

チュエンミーの調査では、4つの村を対象として選択した。この4つの村はそれぞれ特徴が異なる。村ごとに特徴が異なるのは、行政の最小単位の



「社」ではなく伝統的に存在する「村」の単位の経済・社会的なかわりが強いとされる、紅河デルタ農村の特徴をチュエンミーではいまだに残していることの証左であろう。

ゴ (Ngo) 村は、先述したように、隣のハ村とともにチュエンミーで最も古くから螺鈿細工が行われてきた村である。螺鈿細工の技術はこの村からはかの村の世帯に徐々に伝わっていった。チュン (Trung) 村は人民委員会や小学校が位置する社の中心地であり、社の外部へのアクセスもよい立地であることから、螺鈿細工と農業以外の経済活動の機会も最も多い。トゥオン (Thưong) 村は貝殻の調達と加工を行う家内企業が集中しており、螺鈿細工のみを行う家内企業は少ない。ボイケー (Bôi Khê) 村は他の6つの村とは離れた飛び地に位置しており、他の村とは若干異なる歴史をもつ。ボイケー村は、以前は寺や仏像の修繕を専門とする專業村であった (Fanchette and Stedman 2010, 234)。現在、ボイケー村の多くの家内企業は、同じ「象嵌」細工ではあるものの、貝殻の真珠層の代わりに着色した卵の殻を嵌め込み漆で表面を覆う son khâm という細工の小物を製造している (そのため正確には「螺鈿」[khâm trai] 細工ではない)。他の村で行われている螺鈿の技術を用いて開発された新たな製品であるという。

チュエンミーで製造されている製品を大別すると、装飾小物 (漆器の茶碗、お盆、花瓶、壁掛け、宝石箱など)、家具 (たんす、テーブル、椅子、屏風など)、そしてこれらに嵌め込むために加工された貝細工のパーツがある。表4-1は、質問票調査の結果から、4つの村で小物製造、家具製造、貝細工を行ってい

表4-1 4村における各製品生産家内企業数

	ゴ村	チュン村	トゥオン村	ボイケー村
総世帯数 (2012年)	396	228	484	535
調査世帯数	40	40	40	40
小物製造世帯数	40	34	9	39
家具製造世帯数	23	9	10	2
貝細工世帯数	0	6	32	0

(出所) 質問票調査結果より筆者作成。

る家内企業の数を示したものである。この表から、トゥオン村を除けば装飾小物を製造している家内企業が多いことがわかる。ゴ村では40戸すべて、ボーイケー村でも1戸以外はすべての家内企業で装飾小物を製造している。どの村も複数回答をしている家内企業、すなわち複数の種類の製品を製造している家内企業が多い。ゴ村では調査対象の家内企業40戸中23戸が家具を製造しているが、それ以外の村では家具を製造している家内企業は少なくなる。家具の生産には螺鈿の技術だけではなく、木工の技術や加工用の比較的大型の機械も必要とされるためである。

螺鈿細工用の貝細工のパーツは、おもにトゥオン村で加工されている。ただし、トゥオン村の住民は、貝細工のかたわら螺鈿細工の材料（木材、接着剤、塗料など）や製品の売買をする商売を営む家内企業が多く、32戸中28戸は貝細工と材料販売の兼業である。トゥオン村以外では、チュン村でも6戸の家内企業が貝細工を専門に行っている。螺鈿細工の伝統が最も長いゴ村と貝細工を用いない製品を生産している家内企業が多いボーイケー村では、貝細工を行う家内企業はなかった。

どの村も、ほとんどすべての世帯が農地を保有しているが、農作業を行わず、より螺鈿細工に専業化が進んでいるのはゴ村とチュン村である。ゴ村では19世帯、チュン村では31世帯が農作業を行っておらず、農地をすべて貸し出すか作業を外部委託している。農作業を行っていない世帯の数はボーイケー村では9戸、トゥオン村では7戸と少数であった。

### 第3節 螺鈿細工の製造技術

#### 1. 生産工程と分業

伝統的な螺鈿細工の工法では、1人の職人がすべての工程を担っていたそうであるが、現在では伝統的には存在していなかった分業体制がある。まず、

貝殻の真珠層部分からさまざまな形状の細かいパーツを切り出す作業があり、先述のとおりこの作業を行う家内企業はおもにトゥオン村に集中している。なお、材料の貝殻には、ベトナム語で trai, ốc, khau, ngọc nữ など、さまざまな種類の大型の二枚貝や巻貝がある。たとえば trai は細長いパーツ ốc は細かいパーツなど、それぞれ種類の貝殻でつくるパーツの形を変える。伝統的にベトナム南部産のものを使ってきたが、近年ではタイやシンガポールからホーチミンを経て輸入されるものが増えている（高級品はすべて輸入品である）。ホーチミンには、輸入貝殻の貝細工を行う専門業者もいる。

その後、加工された貝を嵌め込む作業（ボイケー村でつくられている製品では、おもに貝殻ではなく着色した卵の殻が用いられる）となるが、ここでは、嵌め込む土台となる木工家具や小物の製造（家具の場合、その製造の作業は整形、彫刻、研磨などさらに細分化される）、木彫、貝殻の嵌め込み、研磨、塗



写真1：螺鈿の原料となる貝。シンガポールからの輸入品である。

(2006年12月 筆者撮影)

装といった作業工程がある。現在では、すべての工程でそれぞれ専門の職人が分業している。家具製造のように据え置き型の比較的大型の機械を使用している場合を除き、多くの作業は住居の一角を工房に当てて作業が行われている。

小物であれ家具であれ、製品のほとんどは基本的には注文生産でつくられる。顧客（おもに小売商）が製品の注文をする場合、デザインが指定される場合が多いという。小物は製品全体のデザインが指定される場合が多く、家具は製品全体の場合と螺鈿部分の絵柄のみの場合がある。芸術性の高い高価な製品の場合は、全体のサイズや形の指定だけがあって、デザインから職人が手がける場合が多いという。その場合、貝殻を嵌め込む職人が下絵から描く場合と（この場合、昔のデザイン画が残されていてそれに沿って下絵を描く場合が多い）、専門の絵描き職人が描く場合がある。

## 2. 技術の変化

チュエンミーの住民は、子どもの頃から親を真似て螺鈿細工の技術を覚えることが一般的であり、社に技術を教える職業訓練校のような機関はない。計画経済時代から存在する小手工業合作社である「ゴハ合作社」が螺鈿細工の技術を教えているが、貧困地域の若者やほかの地域の障害者を受け入れて技術を教える社会福祉的な役割を担っており、チュエンミーの住民を対象とした職業訓練は行っていない。子どもの頃から親の技術をみて育っても、本格的に職業として螺鈿細工を行うようになるには、学校を卒業してから1～3年の技術習得の時間が必要であるという。外部からやってくる職人もいるが、職人のほとんどはチュエンミーの出身者であり、多くの女性も携わっている。

農業の副業として行われていた螺鈿細工の技術は、各世帯内で何世代にもわたり継承されてきた。その中心的な技術は伝統的な手工具を用いた手法であるが、電動工具など新たな機械も用いられるようになっている。国家に認

定された「芸術家」などがつくる芸術性の高い作品は現在でも手作業が多いが、量販する製品は、機械を用いることで、短い時間で同じサイズの同じような品質の製品をつくることができるというメリットがあるからである。たとえば、螺鈿細工の前工程である貝殻の真珠層からさまざまな形状のパーツを切り出す作業は、以前は手作業で行っていたため、その技術習得には時間がかかったが、今では電動のノコギリやドリル、圧縮機といった機械を使い、以前より容易につくることができるようになったという。速く効率的に（ひとつの貝殻から数多くのパーツを切り出すことができる）つくることが現在最も必要とされる技術である。

また、螺鈿細工を施す家具や小物の製造においても、据え置き型の機械（ノコギリ、圧縮機など）や手持ちの電動工具（ドリル、グラインダーなど）が用いられ、貝殻を嵌め込んだあとも、仕上げに電動の研磨機で研磨される。貝殻を木彫に嵌め込む際に漆を使って貼り付けるといった伝統的な技法を維持している家内企業はもはやなく、化学成分の入った接着剤が用いられる（漆の質が落ちたことも原因である）。螺鈿細工の絵柄やその下絵を保存したり拡大したりするために、今ではデジタルカメラやコピー機も用いられる。貝細工や家具、小物製造も含め、そこで使用される機械は特殊用途の専用機ではなく、電動工具を中心とした汎用機械である。緻密な手作業の技術が必要とされる貝の嵌め込み作業は機械では代替できず、それ以外の部分では、専用機を開発する必要があるためである。また、数多くのバイヤーから小ロットの多様な注文を受ける小物の製造の場合、汎用機械の方が多様な製品の製造に有効に使うことができる。

最も伝統のあるゴ村では、国家に認定された芸術家などの高級品をつくっている職人のあいだで、技術やデザインの情報交換をしているというが、それ以外の量産品を製造している家内企業のあいだでは、技術に関する意識的な情報交換はあまり行われていないという。それでも、他の家内企業が導入した新たな生産手法や新たな製品は周辺の家内企業に模倣され、瞬く間に広く普及していく。これも次節でみていく社会ネットワークの存在によるもの



写真2：螺鈿細工の作業風景。若いうちから家業の技術を習得する。

(2013年12月 筆者撮影)

である。

## 第4節 ネットワーク型流通構造の変化

### 1. 移出者とのつながり

チュエンミーは、外部に移出する住民が多い地域である。先述のとおり、フランス植民地期以前から、チュオンゴ村の住民たちが、ハノイに移住してコミュニティを形成していた。現在でもハノイとホーチミンにはチュエンミー出身者のコミュニティがある。紅河デルタの農村は人口稠密で、フランス植民地期以前から南部への移出者は多かったが、チュエンミーではとくに、ドイモイによる経済自由化以降、螺鈿細工という特別な製品の市場機会が都



市部にできたことで、多くの移出者を生む結果となった。筆者がチュエンミーで調査を行った2013年には、ハノイやホーチミンに出稼ぎに出た住民のチュエンミーへの帰還も起きていた。

質問票調査では、「現在移出している家族・親類」と「過去に移出して帰還した家族・親類」について質問した。調査対象世帯全160戸のうち148戸で、チュエンミーから移出している家族か親類がいた。過去に移出していて現在社に帰還している家族・親類がいる世帯は30世帯ある（そのうち27世帯は帰還した家族・親類と現在移出している家族・親類の両方がいる）。移出した家族・親類が過去も現在もいない世帯は9世帯のみであった。

調査時点で、移出している家族・親戚の総数は285人で、そのうちの約半数の141人が世帯主の兄弟であった。世帯主の子どもと孫を合わせると計71人が移出しているが、そのうちの12人は学生である。それ以外では、「親類」も比較的大人数（56人）いる。移出時期はドイモイ開始直後から1990年代に集中しており、その10年強のあいだの移出者は179人を数える。とくに1990年には、単年で最も多い45人が移出している。おもな移出者である世帯主の兄弟たちは、当時20代から30代の若者であった（調査時点での世帯主の平均年齢は43.0歳）。経済自由化後に訪れた都市部の新たな経済活動の機会を求めて、多くの若者たちが都市部へ移出したようである。

対照的に、2000年以降、チュエンミーからの移出は急激に減少した。2000年から調査年の2013年までの13年間で、移出者の合計数は58人しかいない（うち15人は学生）。2000年代以降は近隣で螺鈿細工や農業以外の就業機会が増え、インフラが整備されハノイへのアクセスも向上し、移住を必要としない地理的範囲で経済活動の機会が拡大したことがその要因であると考えられる。

つぎに、表4-2は、移出者の移出先と彼らの職業を示したものである。移出先はホーチミンが最も多く、つぎにハノイ（旧ハタイ省を除く都市部）が続く。ハノイ、ホーチミンともに、移出先で螺鈿細工関連の売買に携わる者が多い。彼らが店舗を構え直接販売している場合もあるが、その多くは代理店



表4-2 チュエンミーの住民の移出先と職業

移出先	生業					
	螺鈿細工	木工	材料, 螺鈿 細工 売買	学生	その他	合計
ハノイ	7	3	29	18	21	78
ホーチミン	54	32	62	3	30	181
その他地域	13	6	1	4	2	26

(出所) 質問票調査結果より筆者作成。

業務、すなわち国内の土産物屋や美術品店や海外のバイヤーからの注文を受け、螺鈿細工職人にオーダーし、出来上がった製品を客に販売するという商売をしている者たちである。つぎに多いのは螺鈿細工職人である。ハノイやホーチミンには、チュエンミー出身者のコミュニティがあり、おもにそのネットワークのなかで螺鈿細工の生産と販売が行われているが、景気の動向により、彼らとチュエンミーに住む商人や螺鈿細工職人のあいだで製品の融通や注文の再委託などを行うこともある（本調査からはどの程度の割合かは明らかにできなかった）。ハノイやホーチミンとチュエンミーとのあいだのこのような経済的・社会的なつながりは、景気の変動による需要の増減などへ対処するための機能を果たしていると考えられる。

ハノイとホーチミン以外では、ナムディン省への移出が多い（12人）。これはおもにナムディン省のハイハウ（Hải Hậu）県への移出である。同県にはアンティーク調（つまり、アンティークの贋物）の家具や小物を製造している家内企業が集積した專業村がある。ハイハウ県やバクニン省（5人移出）の木工品の專業村（次章で詳述）では、これらの地域でつくられた木工品にチュエンミーの職人が螺鈿細工を施すという分業による生産体制が形成されてきた。

## 2. 売買ネットワークの変化

現在では、螺鈿細工に必要な材料の調達や製品の販売を行うに当たり、社

会的なつながりのない商人らをとおした調達、販売が取引の大半を占めている。以前は1990年代にハノイやホーチミンに移出したチュエンミーの住民たちとのネットワークをとおした取引が中心であったが、需要の拡大にともない、彼らとの取引関係から派生した新たな相手との取引の機会が増えていったという。

チュエンミーの家内企業がおもに調達するのは、木材、貝殻各種、接着剤、塗料である。調達先について聞き取りを行うと、「たくさんの人から買っている」という回答を得ることが多いが、質問票調査では、高い頻度で材料を調達する調達先について、どこのだどのような関係の者で、彼らから何を購入しているかを聞いた（表4-3）。家内企業当たり平均2.9軒の相手から材料を購入しており、比較的大規模な家内企業で最大5軒から材料を購入している。

表4-3に示すとおり、材料をチュエンミー内で調達する場合が最も多く、調達先ののべ数は331となった（同じ村からの調達98、チュエンミー社内の他の村から233）。その場合、先述のように商売を行う家内企業が集中しているトゥオン村の住民からの調達が多い。トゥオン村の住民たちの多くは自ら貝殻の加工を行うかたわら、螺鈿細工に必要な材料を仕入れ、チュエンミーの他の家内企業に販売も行っている。ホーチミンからの調達が多いが、これはおもに貝殻の調達である。他の村ではハノイやホーチミンといった外部からの直接の材料調達は少ない。ボイケー村ではハノイの旧ハタイ省地域の他の地域からの調達が多い（表4-3の「その他地域から」78例のうちの63例が旧ハタイ省から）。ボイケー村の家内企業は生産している主製品が異なるため、他の

表4-3 材料の調達先

	チュン村	ボイケー村	ゴ村	トゥオン村	合計
村内から	31	30	0	37	98
社内他村から	95	17	92	29	233
ハノイから	0	2	0	3	5
ホーチミンから	0	0	1	18	19
その他地域から	6	78	3	17	104

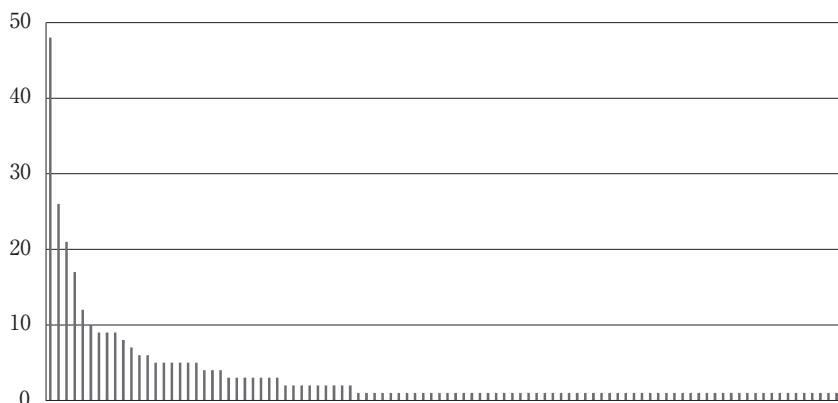
（出所） 質問票調査結果より筆者作成。

村とは異なる調達ネットワークを有しているようである。チュン村とゴ村ではトゥオン村からの加工された貝殻のパーツ調達が最も多いが、チュン村にも材料の売買を行う家内企業が数多くあることがわかる。一方、ゴ村には螺鈿細工の生産に特化している家内企業がより多い。

質問票調査では、主要な材料の調達のべ数463の約7割に当たる329の調達に関して、その材料の販売者を特定することができた。そして、調査対象世帯のうちの何世帯がそのそれぞれの販売者から購入しているかをカウントした。図4-2は、販売先が多い業者を左から順に並べ、その販売者数を示したものである。最も販売先の数が多かったのは、チュン村で接着剤と塗料を販売する専門業者であったが、それ以外の販売先の多い販売者のほとんどはトゥオン村の家内企業であった。数多くの相手と取引をしている少数の販売者と特定の種数の取引とだけ取引をしている多数の販売者がいるという構成である。販売者同士の取引が特定できないが、この図の形から、数多くの取引先をもつ少数の販売者が「ハブ」となって効率的な取引ネットワークが形成されていると推測できる。

一方、製品の販売先について把握することは材料の調達先の把握より困難

図4-2 材料の販売業者の販売先の数



(出所) 質問票調査結果より筆者作成。

であった。それは、小ロットの1回かぎりのスポット取引が多く、長期的な関係のある販売先が少ないからである。回答には「さまざまな地域のさまざまな相手に売っている」というものが116例もある。安定的に製品を供給している取引相手の総数は、全160戸の調査対象家内企業で合わせても151しかない。

安定的に供給している販売先についての把握できているかぎりの限定的な情報によれば、製品は外部のバイヤーなどに直接販売するよりも、村あるいは社の内部の家内企業に販売されるケースが多かった（それぞれ51件と15件）。社のなかで製品を調達して都市部の小売商などに販売を行う、いわゆる在地商人の役割を果たす家内企業が複数存在していると考えられる<sup>(7)</sup>。その他の特徴的な傾向としては、家具を生産する家内企業が多いチュン村では中国への販売が多いこと（13件）、ボイケー村の製品はハノイに多く販売されること（13件）、トゥオン村の貝殻を切り出したパーツはホーチミンにも多く売られていること（16件）が挙げられる。また、製品の販売先も原材料の調達先同様、そのおもな相手は売買以外の社会的なつながりのない相手である。詳細不明な116件の相手も含んだ販売先総数267のうち、250件は家族・親類、親しい友人以外のビジネスの相手に販売しているケースであった。

## 小括

本章では、ドイモイ開始以降の村内外の経済・社会的な環境変化に対する、チュエンミーの各家内企業の伝統的な生業の維持・発展のための戦略的な対応についてみてきた。対応のひとつの柱は生産体制の変化であった。チュエンミーの世帯の多くは、数世代にわたり、農業のかたわら伝統的な家業として各世帯が独立して螺鈿細工を続けてきたが、近年、世帯内の所得や労働に占める農業の割合が減少し、離農と螺鈿細工の専門化がより進んだ。また、伝統工芸といえども、より均質な品質を確保し効率的に多数の製品を生産す

るために、工程の分業と新たな製造技術が導入された。さらに、ナムディン省やバクニン省の木工品生産との分業体制も築かれていった。また、安価で汎用性の高い電動工具を中心とした機械の購入で、緻密な技術を必要とする手作業以外の部分の生産性を向上させてきた。

変化に対するもうひとつの対応は市場の開拓あるいは拡大であった。ドイモイ開始以降、国民の所得が向上するとともに、都市部を中心にぜいたく品である螺鈿細工の需要が高まり、一方で貿易の自由化は海外の新たな市場の開拓の可能性を広げた。チュエンミーの住民の多くは、1990年代にその機会をとらえてハノイやホーチミンといった都市部へ移住し、螺鈿細工の製造、材料調達、販売の新たな拠点を形成した。これらの移住者コミュニティとチュエンミーは、社会的なつながりをとおして取引を行ってきた。

しかしその後螺鈿細工の需要が拡大し、1990年の移出者以外の專業村内外の商人や業者たちとの調達・販売ネットワークも形成されていった。とくに材料の調達は、社外の移出者や商人らと直接取引するのではなく、トゥオン村の住民をとおした調達の割合が大きくなっている。トゥオン村には、チュエンミーの外の材料の販売者や製品の顧客と取引をする在地商人的な家内企業が数多くある。小規模な家内企業が多数の取引相手と取引を行う構図は鉄鋼の專業村チャウケーでも観察されたが、チュエンミーの場合はチャウケーに比べ、より多くの相手と小規模でアドホックなスポット取引が行われている。この差異は財の性質のちがいに由来するものであろう。チュエンミーで生産される製品は、大型の家具を除けば、都市部の多くの小売店や輸出業者が取り扱っている製品であり、その単価も低く、取引の回転も早い。

チュエンミーの例は、伝統は技術や生産・販売体制を変化させてきたからこそ生き残り、さらに発展したことを示している。とくに分業や取引慣行などは製品市場の急速な量的・地理的な拡大に対応する形で生み出されてきた。本章は、技術や生産・販売体制の変化を可能にしたのが個人のあいだのつながりにあったのではないかという点に注目した。すなわち、個人のつながりをとおして技術や市場に関する知識を獲得し、彼らのあいだで協力関係、あ

るいは分業関係を形成したことで、チュエンミーの家内企業は変化し拡大する市場に対応できたという結論である。

ただし、そのつながりの質は時とともに変化してきた。ドイモイ開始直後の螺鈿細工の市場がハノイやホーチミンで形成され始める時期は、チュエンミーから移出した家族・親類とのつながりをとおした取引ネットワークであったが、市場の拡大にともない、村内外の単に経済的な取引のみを行う数多くの取引相手とのつながりに取って代わられた。

この、地理的にも社会的にも不均質な（すなわち近いもの同士のつながりと遠いもの同士のつながりとの組み合わせからなる）ネットワークは、スモールワールド性をもったネットワークということができるだろう。ドイモイ開始以前の伝統工芸としての螺鈿細工の発展は、村のなかの凝集性（クラスター性）の高いネットワークが技術の伝承を可能にした。そして経済自由化にともない移出したチュエンミー出身者が、都市の市場との新たなつながりを形成し、生産者と市場を結ぶつながりが増え、距離が短くなった。そして、需要の拡大にともない、さらに家族・親類以外の取引先との「つなぎ替え」が起こった。これは、数多くの都市部のバイヤーらとの「弱い紐帯」が市場や技術の情報をもたらすうえで有効になったからと解釈できる。さらに、トゥオン村の商人の集積のような「ハブ」も形成され、全体的なネットワーク距離がさらに短くなり、効率的な取引が行われるようになったと考えられる。本研究は、これらの議論の実証的な検証を行うことを目的としているわけではないが、社会ネットワーク分析の理論をヒントにすれば、チュエンミーで起きてきたことは、計画経済の時代が終わり、各個人が自由に独自の判断でさまざまな相手とのつながりを結んだことで、自己組織的に効率的なネットワークが形成される過程であったと解釈できる。

〔注〕—————

- (1) ハタイ省は、フート省に合併されたひとつの社を除き、2008年にすべてハノイに合併吸収された。旧ハタイ省もバクニン省同様、古くから伝統的に専

業村が多い地域である。有名なものとしては、絹織物のヴァンフック村、「ノン」と呼ばれるすげ笠のチュオン村などがある。

- (2) 1960年代にはすでに「グラフ理論」が考案され、直接・間接的につながっている人同士の関係を、「距離」「密度」「範囲」「つながり」「クラスター性」「多重性」といった指標で数値に変換し分析することができるようになった (Wasserman and Faust 1994)。そして、統計と確率モデル、および代数モデルの洗練により、ネットワークの構造やシステムのより正確な計測が可能になっていった。これが静的な社会構造の分析である。

- (3) 社会学者スタンレー・ミルグラムは、1967年の論文 “The Small World Problem” (Milgram 1967) で「世界の見ず知らずの2人の個人のあいだは、平均5人の媒介者でつながっている」という実験結果の謎 (なぜたった5人という少ない媒介者で世界はつながるのか) を提起した。この謎を理論的に解明したのが、物理学者ダンカン・ワッツとスティーブン・ストロガッツの論文であった (Watts and Strogatz 1998; ワッツ2004)。

ワッツとストロガッツによれば、規則的なつながりをもつネットワーク (同論文ではすべての点が両隣ともうひとつ隣の点の計4つの点とつながっている環状格子を例に挙げている) を想定すると、この状態では点同士の平均距離 (任意の点から他の任意の点につながるまでの次数) は非常に大きく、また各点は多くの局地的な塊を形成 (クラスター化) している。つぎに、このネットワークの線をランダムにつなぎ替えると、つなぎ替えを始めた直後に、クラスター係数が大きいまま平均距離が劇的に減少する。つなぎ替えによりクラスター同士の「近道」(short cut) ができ、これが平均距離 (任意の2点間の距離) を減少させるからである (Watts and Strogatz 1998, 440-441)。「スモールワールド性」のあるネットワークとは、この規則的なつながりと「近道」として機能するランダムなつながりが並存するネットワークである。

- (4) これは、1990年代末から登場し始める「複雑系ネットワーク」の理論であり、その代表的なものが「スケールフリー・ネットワーク」モデルである。たとえば、とあるネットワークに新たな点に参加するとき、多くの次数をもつ点とつながりやすい (「優先的選択」というルールを設定したモデルを用いて複数回数繰り返すシミュレーションを行い、その点の分布を示すと、多くのつながりをもつ「ハブ」として機能する少数の点と、少数のつながりしかもたない圧倒的多数の点からなるベキ乗の分布 (正規分布のような特定の典型値がない分布であるため「スケールフリー」とよばれる) になるというものである (Barabasi and Albert 1999; バラバシ 2002)。

- (5) そもそも、SNAの枠組みでは、実証的な研究は困難である。社会的なつながりは質的に多様であり、姻戚関係など一部を除けば頻繁に変化し得るからである。事実、SNAの先行研究のほとんどはシミュレーションによる結果を



示したものであり、実証研究は、特定の目的で「つながっている」ことを厳密に定義でき定量的に示すことができる非常に限られた分野に限定される（たとえば特許の共同出願者のネットワークを研究した Fleming, King, and Juda 2007など）。

- (6) 1930年代のビエール・グルーの農村調査記録にも、この地域の螺鈿細工が18世紀後半に始まったという記述がある（グルー 2014, 463）。
- (7) 販売先のデータは調達先のデータ以上に不完全な情報であり、回答から販売相手の名前まで特定できているケースは57件しかないが、この不完全な情報によれば、在地商人的な家内企業が少なくとも5戸はある。

